短　報

看護学部の実習強化に向けた 看護学部と病院看護部の協働のプロセス

菱沼　典子[1)]　井部　俊子[2)]　柳橋　礼子[3)]　吉川久美子[4)]
髙井今日子[5)]　中村めぐみ[6)]　松谷美和子[7)]

The Collaborating Process of the Faculty of Nursing and the Hospital Nursing Division to Enrich the Clinical Practice for Nursing Students

Michiko HISHINUMA, Ph.D, RN[1)]　Toshiko IBE, Ph.D, RN[2)]　Reiko YANAGIBASHI, MS, RN[3)]
Kumiko YOSHIKAWA, RN[4)]　Kyoko TAKAI, MS, RN[5)]　Megumi NAKAMURA, MS, RN[6)]
Miwako MATSUTANI, Ph.D, RN[7)]

〔Abstract〕

This short report describes the process of creating the new educational system for clinical practice of nursing students at St. Luke's International University. In April 2014 St. Luke's College of Nursing and St. Luke's International Hospital were combined into the new St. Luke's International University called 'a living organism'. The faculty of nursing and the hospital nursing division started discussions in November 2013 on how to push clinical education for student nurses. As a result we have two new educational systems. One is a master's program for clinical nurse educators. It began in the 2014 academic year with five RN students from the hospital. They will return to the hospital to provide the clinical education for students. The second program is to develop educational resource nurses assisting students in the clinical settings along with the faculty members. The faculty members and nurse managers discussed and agreed upon the roles of the faculty, the educational resource nurse and the staff nurse. Responsibilities and the roles of each were formalized into documents. To promote these new systems, we planned a variety of educational meetings, for example, introduction to the new systems for all staff and the program for the educational resource nurses. The challenge of the new living organism has just begun and we are thankful it is unfolding in a steady manner.

〔Key words〕 nursing education, clinical practice, educational system, collaborate

〔要 旨〕

この小論は，聖路加大学国際大学において学部生の臨地実習を強化するために，看護学部と病院看護部が協働して，新システムを立ち上げた過程の記録である。2014 年 4 月，聖路加看護大学と聖路加国際病院は聖路加国際大学のもとで一体化した。看護学部と病院看護部は 2013 年 11 月から話し合いを開始し，2 つの新しい試みを始めた。一つはクリニカル・ナース・エデュケータの教育を大学院修士課程で開始，

1）聖路加国際大学看護学部長，基礎看護学　St. Luke's International University, Fundamental of Nursing
2）聖路加国際大学学長，看護管理学　St. Luke's International University, President, Nursing Administration
3）聖路加国際病院副院長，看護部長　St. Luke's International Hospital, Vice President, Head of Department of Nursing
4）聖路加国際病院副看護部長　St. Luke's International Hospital, Department of Nursing
5）聖路加国際病院副看護部長　St. Luke's International Hospital, Department of Nursing
6）聖路加国際病院教育センター，FDSD 部部長　St. Luke's International University, Education Center
7）聖路加国際大学看護学教務部長，看護教育学　St. Luke's International University, Nursing Education

受付　2014 年 10 月 30 日　　受理　2014 年 11 月 18 日

4月から5名の病院看護師が入学している。彼らは病院に復帰後，学生指導を担う予定である。2つ目に，大学教員とともに臨地実習での学生の学びを支援する人材として，学部実習担当者を配置した。教員，学部実習担当者，部署スタッフ各々の責任と役割を話し合い，看護学部と病院看護部の合意のもとで明文化した。新システムの周知のために研修会を企画し，一体化の説明，学部実習担当者の研修等を行った。新組織は始まったばかりであるが，着実な一歩を踏み出せたことを感謝している。

〔キーワーズ〕 看護基礎教育，臨地実習，指導体制，コラボレーション

Ⅰ．はじめに

2014年4月に，学校法人聖路加国際大学のもとで，旧聖路加看護大学と旧聖路加国際病院は，同一組織となった。その目的は，双方の創立者であるルドルフ・B・トイスラーの創立の理念―日本の医療の質の向上とその働きの中にキリスト教の愛を具現化することを，さらに推し進めるためである。

一体化の具体的目標は，聖路加国際病院における看護学実習の在り方を，質，量ともに刷新し，看護学基礎教育の新たなモデルを作ることである。このために旧大学から学長，学部長，教務部長，教務課長，事務局長，局長付事務員，旧病院から看護部長，副看護部長2名，教育研修部副部長の10名から成る看護ワーキンググループが，2013年11月に立ち上がった。

本報告は，看護ワーキンググループの活動を中心として，看護学部と看護部全体が協働したプロセスの記録である。

Ⅱ．看護における聖路加の役割と看護基礎教育における実習をめぐる課題

1900年にトイスラーが来日し，医術が整っている割には成果が出ないのは，看護が著しく不足しているからだと判断，1920年に聖路加国際大学の前身となる，聖路加国際病院付属高等看護婦学校を創立した[1)]。この学校は，それまでの日本の看護師養成の基準とは異なり，北米の3年間のカリキュラムを導入，専任の教育担当者としてアリス・セントジョンを招聘，日本の看護の向上を目指すことから，卒業後に聖路加国際病院へ勤務する義務はなく，カリキュラムは公衆衛生（予防）の視点を入れたものであった。

そして1928（昭和3）年に，文部省管轄の戦前のわが国における女子の最高学府である聖路加女子専門学校にするに当たって，病院付属をやめ，別法人を設立した。そして戦後，1954（昭和29）年に今に連なる学校法人が整備された。トイスラーによってはじめられた聖路加の看護は，当初よりわが国の看護をけん引する役割を果たしてきた[2)]。看護教育の大学化が進展している今日においても，本学にはその役割を変わらずに果たす使命がある。

今回の，トイスラーを共通のルーツとするもの同士の学校法人の中での一体化は，日本の看護の質の向上によって日本の医療の質の向上をめざし，人々の健康と福祉に貢献するというトイスラーの志を再度確認し，トイスラー来日から1世紀を超えた今の世界の中で，医療の質の向上に不足していることは何かを，改めて考える機会となっている。長い船旅を経て，極東の地に国際人トイスラーがやってきた時代より，世界は格段に狭くなっており，否応なしのグローバル社会となっている。その中でも看護・医療を牽引する意味ある役割を果たしていくべきことから，大学名に「国際」が組み入れられた。

一方，看護学を学べる大学は急増のカーブをとめておらず，2014年度232課程に上る。医療機関では，技術の実施内容を制限する方向になっており，臨地実習の形骸化，見学実習の増加が懸念されている[3)]。2単位の多領域の実習を繰り返すカリキュラムは，場になれてくる頃に終わり，次へ移るという繰り返しで，乗り切ればいいという感覚をもたらしている。どこの世界でも，はじめから一人前が期待できるものではなく，研修期間を設けるのは当然である。が，それにしても，全身清拭をしたことがない，沐浴をしたことがない，採血したことがない等々，ないない尽くしの状況は，はたして看護職・看護学の基礎教育として，ふさわしいのであろうか。これに対し，新人看護職員研修の努力義務化（2010年）が定められたが，これは課題の先送りであり，基礎教育と新人教育の連携も強く求められているところである。

実習は，健康にかかわる課題を持つ人々に実際に接し，知力と体力と技術力を駆使して，その人々の課題に共に添う経験を通して，人々に向き合う看護の姿勢を作り上げることが，最大のねらいである。これは座学からは得られないものであり，実習を重要な教育手段として強化する意義はここにある。病院と学部の一体化の中で，乗り切る実習・見るだけ実習から，手を出す実習・恒常的な実習への転換にチャレンジし，新しい基礎教育のモデルを提示していきたいと考えている。実習は病院ばかりではなく，広く国内外の保健医療福祉の現場でも展開していく予定であり，必修25単位，選択9単位を準備し

表１　2015 年改訂カリキュラムの実習科目（案）

学年	前　期	後　期	
１年	コミュニケーション実習（1）	サービスラーニング*（2）	
２年	サービスラーニング*（2）	基礎看護技術実習（1）	看護展開論実習（2）
３年		７領域（小児・周産期・成人慢性・成人急性・老年・精神・在宅）実習（15）	
４年	総合実習または養護実習（3） 課題探究実習*（4）	卒業研究（3）	卒業実習チームチャレンジ*(3)

*選択科目　　（　）内単位数

ている（表 1）。

Ⅲ．看護ワーキンググループでの検討の前提

聖路加国際大学への転換で，より優れた看護実践・看護教育をしたいという思いは，看護学部，病院看護部とも共通にしている。聖路加の看護教育が，聖路加国際病院の看護師を育成することではなく，日本の看護の向上に資する人材を育成することは変わらない。学生が自分たちの病院に就職する，しないは問わず，どこに出て行っても将来看護の質の向上に役立つ人に育てるのが，目標である。

病院における看護は，これまで以上にエビデンスに基づいた良質なものにすることが，大学病院となることの意味である。すでに高い評価を受けているが，学として発展している看護学の成果を使い，またともに研究することで，より良質な看護を提供していくというチャレンジが始まる。

聖路加で働く看護職は，基礎教育をさまざまなところで受けている。その多様性は創造性を豊かにし，チャレンジを可能にする。したがって看護職が，それぞれ自分が受けた教育を誇りにし，大事にすることが土台にあり，その上で，トイスラーの志に共感し，それを引き継ごうという思いがあるかどうか，この１点のみがポイントであることを互いに了解しておきたい。

Ⅳ．看護ワーキングでの検討内容

1．クリニカル・ナース・エデュケータの育成

聖路加国際病院では看護職は皆指導者であるという基本姿勢で，実習指導者を配置する・しないも含め，実習への取り組みは，部署にまかされてきた。学生が病院を身近に感じ，看護学実習を当たり前の学修にしていくには，実習単位を増やし，4 年間にわたって病棟で過ごす機会が必要となる。しかし学部の教員が常に学生と同行する現行の方法では，これを実現するのは難しい。そこで，病院の各部署に，大学院修士課程で看護教育学を学んだクリニカル・ナース・エデュケータ（Clinical Nurse　Educator：CNE）を配置する計画を立てた。大学の研究科委員会では，看護教育学に上級実践コースを立ち上げ，学部教育の指導，将来的には新人教育にかかわる人材を想定し，カリキュラムを作成した[4)]。このコースに，病院から看護師を派遣することを決め，病院では「在籍学位取得者取扱規定」を策定して，在職のまま 2 年間の研修を受けられることを制度化した。2014 年度，5 名が修士課程で学んでいる。

2．学部実習担当者の設置と教員，学部実習担当者，部署スタッフの役割の作成

CNE の育成には時間を要するため，2014 年度の実習から全部署に学部実習担当者を置くことを決定した。病院では新人教育のためのティーチング・ナースの制度があるが，これとは別に，学部実習担当者を制度化した。教員，学部実習担当者，部署スタッフのそれぞれの役割を明確にするため，2013 年 12 月に文章化をはじめた。病院ではナース・マネジャー会で，学部ではスタッフ・ファカルティミーティングならびに実習担当者から意見を募り，修正を重ねて合意できた範囲で，2014 年度版を完成させた（表 2，3，4）。

本年度，学部実習担当者は活動時間の記録を行い，総計 1,000 時間を目標としている。

3．実習新体制の周知

病院看護師と大学教職員を対象に，これからの実習のあり方に関する説明会を開催し，学長から法人一体化の経緯とねらいについて，学部長から実習体制の変更について説明を行った。2014 年 3 月 5・12 日の 2 回で病院職員 210 名，大学教職員 40 名，計 250 名が参加した。

次いで学部実習担当者の研修会を 2 段階にわけて行った。これは病院看護部のプログラムとして実施した。ステップ 1 は 2014 年 3 月 19・26 日に，看護学部における実習の概要（学部・菱沼）と教育方法としての臨地実習（学部・松谷）であった。ステップ 2 は 2014 年 4 月 10・11 日に，学部実習体制と実習担当者の役割（教育センター・中村），学生の特性と留意点―学生の実習への不安と自己効力感を高める関わり（学部・池口），学生の特性と留意点―実習を受け入れた臨床の立場から（病院・千々輪）を行った。この実習指導者研修会には，学部実習担当者 49 名と，ナースマネジャー・アシスタントナースマネジャー17 名，大学教職員 17 名が参加した。

病院のナースネジャーと大学教員が会する看護教育会議を年 2－3 回定期的に開催しているが，2014 年 4 月の看護教育会議にて，上記研修会の報告を行い，これからの実習でどのような取り組みが可能かを，教員とナース

表２　教員の役割（2014 年度版）

【役割責任】
1. 学生の学習に責任を持ち，評価する。
2. 学部実習担当者と連携をとり，実習の準備態勢を整える。
3. 看護管理者，学部実習担当者，実習部署スタッフとともに，実習を実施する。

【活動内容】
1. 学生の学習への責任と評価について（評価方法は実習のレベル・目的による）
・学生への実習オリエンテーションを行う。
・実践場面での学生の実習目標の達成度をアセスメントする。
・実習ノートをみて，コメントし，学修プロセスを促進する。
・臨床場面を教材化して学生に説明する。
・カンファレンスを設定して，看護管理者，学部実習担当者，実習部署スタッフの参加を得る。
2. 実習の準備態勢について
・実習目標・方法を看護管理者，学部実習担当者に説明する。
・実習体制を看護管理者，学部実習担当者と相談して決める
・学年（実習科目）ごとに，看護ケア・医療処置がどこまで実施可能かについて，看護管理者，学部実習担当者に説明・相談し，申し合わせる。
3. 実習の実施について
・学部実習担当者と相談して，学生と受け持ち患者とをマッチングさせる。
・患者へ説明し，最終許可を得る。
・学部実習担当者，実習部署スタッフと連携しながら，必要に応じて学生と共に看護ケアを行い，学生の学習を促す。
・学生の出欠状況を把握し，学部実習担当者へ連絡する。
・学部実習担当者と学生の学習状況を連絡しあう。
・学生の心身の健康面の管理について健康管理室と連携し，必要に応じて学部実習担当者へ連絡する。
4. 実習後の振り返りについて
・看護管理者，学部実習担当者と実習の振り返りを行う。複数の部署で実習をした場合は，他部署との情報交換も行う。

表３　学部実習担当者の役割（2014 年度版）

【役割責任】
1. 学部実習担当者は聖路加国際大学看護学部の実習カリキュラム・実習目標を理解し，看護管理者とともに効果的な実習となるよう実習環境を整えるよう努める。
2. 担当教員および実習部署スタッフとの連携をとり，実習目標が達成できるように支援する。

【活動内容】
所属部署の看護管理者とともに以下の活動を行う。
1）大学の学年ごとの実習目標を把握し，臨床における実習が効果的に展開されるよう連携・調整を行う。
・実習体制を看護管理者とともに検討し，教員と相談するミーティングに参加する。
・教員と看護管理者とともに，看護ケアや医療処置がどこまで実施可能かを申し合わせる。
・看護管理者とともに協力が得られる患者を選択し打診する。
・学生と患者とのマッチングについて教員に協力する。
・スタッフに実習目標と実施内容，部署の実習体制を周知し受け入れ体制を整える。
2）実習中は部署の窓口となり，情報共有を行う。
・部署オリエンテーションを行う。
・学生が受け持つ患者の電子カルテの必要情報へのアクセス方法をアドバイスする。
・カンファレンスの運営に協力する。
・スタッフや学生から情報を収集し，看護管理者，担当教員と調整を行う。
・学生の出欠や健康面など，教員と連絡を取りあい，看護管理者に報告する。
3）実習の打ち合わせや振り返りの会に看護管理者と共に参加し，指導教員および他部署の担当者とも情報交換・共有を密に行う。

表４　部署スタッフの役割（2014 年度版）

【役割責任】
1. 実習部署のスタッフは聖路加国際大学看護学部の各領域の実習カリキュラム・実習目標・実習内容を理解し，学生を看護チームの一員として迎え，効果的な実習となるよう実習環境を整えるよう努める。
2. 臨床での事象すべてが学生の学びとなることを理解し，学生の体験を共有するという意識を持ち関わるよう努める。

【活動内容】
原則として所属部署の看護管理者，学部実習担当者の指示に従いながら，学生実習をすすめる。
1）学生が受け持つ患者のケアに責任を持つ。
2）実習目標と実習内容，実践してもよい看護ケアを理解する。
3）実践の場で実習を推進する。
・看護師のロールモデルとして「看護ケアを学生に見せる」「学生とともに看護ケアを行う」「学生の看護ケアを見守る」という姿勢をもつ。
・学生が担当しない患者のケアにも，看護管理者または実習担当者と相談の上で同行させるなどの教育的配慮を心がける。
・学習者としての学生の立場を理解し，学生の動機付けになるフィードバックを心がける。
4）看護チームの一員としての学生の行動計画や看護計画を検討する。
・患者の情報収集や病状の理解を確認し，必要時アドバイスや変更を促す。
5）学生の学習状況や共有が必要な事項は，看護管理者または実習担当者ならびに教員に報告する。
6）実習中に行われる学生実習に関するカンファレンスに，積極的に参加する。

マネジャーがグループになって自由に討議した。7月の第2回看護教育会議には，学部実習担当者も参加し，大学院CNEコースの学生の出席も促した。学部実習担当者の紹介のあと，病院の5部署から学部の実習に対する取り組みを各5分で紹介してもらい，これからどんな工夫ができるかを自由に討議した。

さらに2014年夏のファカルティ・デベロップメント／スタッフ・デベロップメント研修会では，FDSD委員会の企画により，病院スタッフの参加も得て，「新たな実習指導体制の構築―これからの実習について考えよう」をテーマに，研修が実施された。

Ⅴ．おわりに

一体化から半年が経過し，3年生の実習が始まったところである。今後は学部実習担当者を配置した効果や，明文化した役割が妥当かの見直しを行っていく予定である。また，学部と病院の人事交流や，目指す看護の検討，実践・教育の改善へのチャレンジは，まだまだこれからであるとは思いつつも，地に足がついた新体制への一歩が踏み出せたことを感謝している。

謝　辞

看護ワーキンググループの活動に多大なご協力を得た渡辺法人事務局長，高橋教務課長，松崎入試室事務員に感謝いたします。

引用文献

1）前田あや．（1977）．聖路加看護大学–その発足と歩み（その1　1920～1941）．聖路加看護大学紀要，5，1–27.
2）Nursing in Japan.(1927, Aug. 7). Japan Times.
3）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会．（2011）．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告．pp. 1–4.
4）フューチャー・ナースファカルティ育成プログラム．聖路加国際大学ホームページ．http://www.slcn.ac.jp/graduate/master/fnf.html.［2014.10.1］